繁殖のお話し（その17　哺育管理のお話　3）

（有）シェパード　獣医師　松本大策

ここのところただでさえ景気が悪いのに（いざなぎ景気を超えて景気がいいって、どこの話？）地震だ台風だ、と追い打ちをかけるような出来事が続きますね。人災にせよ天災にせよ、みなさんで力を合わせて知恵を寄せ合い雑草のごとく生き残りましょうね。マスコミでは、日本の人口が減少するとか少子高齢化で国力が低下するとか、暗い話題が多いのですが、人口が減るということはゆとりで出てくるということです。かえって人間らしい幸せが手に入りやすくなると思います。今の世の中は、人口密度が生き物としての限界を超えていきぐるしくなっていますからね。

さて今月は、哺乳の管理の続きで、とくに「群れ」のことについて考えてみましょう。子牛をケージやカーフハッチで個別に飼育する場合は、これまでお話ししたような事に注意すればよいのですが、哺乳ロボットや多頭マスでの手やり哺乳では、それに加えて「群編成ストレス」についても考慮する必要があります。

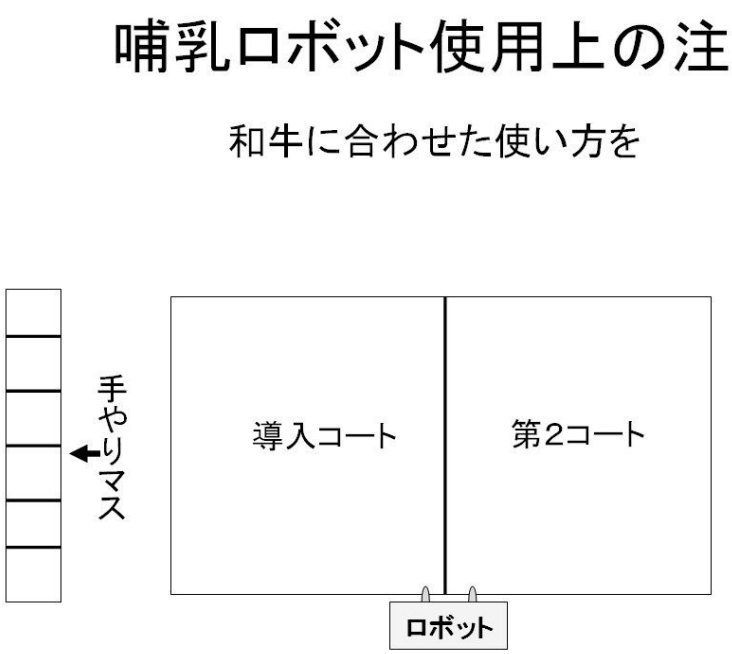
牛さんは群れを作る生き物ですが、「群れを作る」という行為はストレスも伴います。群れを作るとき、牛さんはケンカをしてボスから最下位までの順位を決めます。もしも群れの頭数が多いと、それだけケンカの回数も多くなる計算です。たとえば、6頭の群れなら全頭総当たりリーグ戦でケンカする回数は、６×５÷２×１で15回ですみます。でも群れが10頭だったらケンカの回数は10×９÷２×１で45回！　なんと頭数が4頭増えただけでケンカの回数自体は3倍にもなってしまうのです。ケンカが増えるということは、それだけストレスのかかる期間も長くなりますしストレスも大きくなります。

じつはこの「群変性ストレス」で群れ全体の免疫が半分以下に低下してしまうのです。この免疫低下は2週間前後がピークで3週間程度続くといわれています。ですから、子牛の1群れの頭数は、なるべく少ない方がよいのです。とくに和牛では群れを作る力が弱いので、1群で30頭超えると極端に病気が増えてしまいます。僕は出来るだけ、子牛の群れは10頭以下、出来れば6頭ぐらいにしましょう、と指導するようにしています。これだけでも病気の発生はグッと減るのです。

また、ようやく安定した群れに、もしも1頭でも新入りを追加すると、新入りだけでなく元の群れのメンバーも含めて全頭の免疫が再び低下してしまいます。ここは大切な部分ですから、じっくりと読んで下さい。よく見かける群飼育では、新しい子牛が産まれたら哺乳群に追加して、哺乳群で大きくなった子牛は群れから出して育成群に加える、という管理がされているところが多いのです。このやり方では、いつまで経っても群れ

が安定せず、常に群編成ストレスにさらされた状態のため、子牛の免疫がずっと低いままですから、下痢や肺炎などの病気が蔓延しやすくなってしまうのです。

「そうは言っても子牛は一度に生まれるわけじゃないし．．．」って言われそうですね。問題はそこです。僕は、群編成を一度で済ませて、群れに新しい子牛を追加しないためのやり方として、「1群の頭数分の手やりマス」の設置を指導しています。



図にあるように、子牛が産まれるごとに、まず手やりマスに入れて手やり哺乳します。子牛の数がそろったら、せーの、ドンで広場に移し、1回で群れを作らせます。もちろんこのときに群編成ストレスはかかりますし、免疫も3週間程度は低くなります。ですから、その期間はしっかりと観察して病気を防いであげるようにします。しかし、このやり方なら、群編成後3週間も経つと免疫も回復していて、再度低下することはないので、病気がずっと蔓延することがないのです。一見面倒くさいようですが、群飼の子牛で病気が蔓延したときの苦労に比べれば、1群の頭数がそろうまでの手やり哺乳なんて全然苦労じゃありませんよ。